

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500548		
法人名	有限会社ウエルハート		
事業所名	グループホーム幸生園		
所在地	宮若市龍徳1488番地		
自己評価作成日	令和3年1月13日	評価結果確定日	令和3年1月30日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和3年1月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

訪問看護ステーションとの医療連携体制も6年目を迎え今年度はコロナ禍の中、3例目の看取りを行い入居者の最期を支援することができた。訪問看護ステーションとの連携により看取りの他、ストーマ造設の方の受入れや入院の回避、早期の退院など必要な支援の実現につながった。また、コロナ禍により面会が出来ない状況が長期に及ぶ中「幸生園ファミリーだより」を通して元気な様子を家族に届けることができた。それに対し家族からコロナ禍の中奮闘する職員へ向けて、労いや激励の手紙をいただくなど、今まで以上に家族との良い関係性を築いた点もあった。レク、行事、外出活動などこれまで力を入れていたものを今後どのような形で提供していくか、感染防止と工夫を凝らし作っていくことが課題である。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「入居者から課題をもらい、対応を全職員で話し合っている」と明るく元気に話す職員から、理念の実践が伺える。車いすの入居者の「家を空けられん」との思いを傾聴し、まずは歩けるようにと手すりでの立ち上がりは、排便がスムーズとなる波及効果もあった。昨年10月、家族と話し合いを重ねてかかりつけ医や訪問看護との連携で、全職員が一丸となった看取りは、家族から篤い信頼を寄せられた謝辞となっている。毎月家族に、ホームの取り組みや個別の暮らしぶり、連絡事項などを記載したホーム便りに写真を添えて送付したり、運営推進会議の参加者には暮らしぶりなどを書面で報告している。家族や地区区長からは職員への感謝や労いの返信があった。地域の方の情報で、以前体験入居された方を保護し自宅に送り届けるなど、地域の情報提供や相談窓口として、今後も地域に密着したグループホームならではのサービスの提供が期待できる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

 ユニット/
事業所名 **もみじ棟/グループホーム 幸生園**

自 己	外 部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「明るく、優しく、元氣よく」の理念のもと、ここに来て良かったと本人も家族も思えるケアの実践に努めている。	日々入居者に寄り添ったケアで、グループホームならではのケアを目指している。「入居者から課題をもらい、対応を全職員で話し合っている」と明るく元氣に話す職員から、理念の実践が伺える。	入居者とともに理念の唱和が実現し、さらなる理念の具現化を期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小学校、幼稚園との交流会や運営推進会議への区長、民生委員の参加により地域とのつながりや情報提供を行っている。 ※令和2年度は新型コロナウイルスの影響により中止。	管理者は地域の専門医療機関から要請され、オンラインで認知症研修の講師を引き受けている。以前徘徊していた入居者を保護していただいた地域の方の情報で、以前体験入居された方を保護し、自宅に送り届けるなど、地域の情報提供や相談窓口となり、近隣からの野菜の差し入れも多い。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域小学校からの要請で交流会をしている3年生向けに認知症の理解や支援方法を教える場を設けている。(年1回)※令和2年度は新型コロナウイルスの影響により中止。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	普段の様子やレクや行事等の参加の様子を動画にて参加者に視聴してもらうことで、入居者の様子をより知ってもらうことができた。※令和2年度は新型コロナウイルスの影響により書面のみで対応。	運営推進会議は中止しているが、参加者には日頃の取り組みや入居者の状況を書面で報告し、意見をお願いしている。コロナ禍の中、対応する職員の労いの返信もあり、議事録とともに玄関で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には毎回参加しており、園の運営等について理解をしてもらっている。※令和2年度は新型コロナウイルスの影響により議事録送付にて対応。	毎月、市担当者から居室状況の問い合わせを受けている。地域包括支援センターとは、入居受け入れや成年後見制度活用の相談など、情報交換や協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束排除の基本方針を整備し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	定期的に身体拘束適正化委員会を開催している。密になる機会を少なくするために、全職員に身体拘束に関するDVDを配布し、自己学習を行っている。「待つ」ではなく、入居者が納得できる声かけをしたり、家族の了解を得てセンサーを使用し、転倒を防止している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入浴時の全身チェックで気づいた点など逐一報告があり、どのような要因で発生したかを職員間で共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居者のうち身寄りのない生活保護受給者については、包括支援センターに協力を依頼し2名の入居者に成年後見人をつけることができた。	地域包括支援センターと連携し、2名の入居者が成年後見制度の利用に至っている。医学的処置決定の後見はできないが、当該入居者にとって不利益が被らない事案は後見すると話す専門職もある。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結にあたっては、必ず施設見学を行って頂き、十分に時間をかけて説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関にご意見箱を設けて、家族の意見や要望をお願いしている。	毎月発行しているホーム便りで、訪問看護管理者を講師とした感染予防研修などの取り組みを報告したり、個別の暮らしぶり、連絡事項などを記載し、写真を添えて家族に送付している。家族からは感謝や労いの言葉、サツマイモの差し入れをいただいている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ禍にあつて入居者の医療機関受診について職員から自粛をして欲しいといった意見があった。	月1回、密を避け各ユニット毎にミーティングを開催している。出された意見は全職員で回覧し、ホーム長や管理者などの会議で検討されている。職員の要望でキャスター付きシャワーチェアが購入され、安心・安楽に入浴介助が行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の自己評価を行っており、自己の仕事への取り組み方等を振り返る機会を設けている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	70歳定年であるが82歳の方から応募があった際も一度面接したうえで採否を決めている。また、その能力が発揮できる者については、70歳定年以降も契約延長し勤務している。	ホーム長は入居者に優しくできるかを採用条件としているが、昨今70歳以上の方の職員応募が多くなり、多忙な時間帯の介助状況を見学してもらっている。状況によっては職員が自ら昼休みも食事のみとしたり、厨房担当者も率先して見守りや散歩に同行するなど、チームケアが実践されている。レクリエーション研修の成果を、貼り絵などで生き生きと発揮する職員もある。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員の入居者への接し方や言葉かけには日頃から注意を払い、改善点がないか取り組んでいる。	感染予防対策としてマスクを着用しているが、聞き取りが悪い高齢者は伝達時のみマスクを外している。管理者は常に職員の接遇に留意し、指導や話し合いの場を設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員不足に加え新型コロナウイルスの影響により法人外での研修機会の確保は困難な状況にある。GHみやわかの集まりも今年度は中止となった。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	GHみやわかに参加しているが、令和2年度は新型コロナウイルスの影響により中止となった。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	マスク着用の為、表情や声のトーンに注意を払い、安心感を与えるような接遇を意識している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居までにヒアリングの回数を重ねて少しずつ関係を築いている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族自体がわからない部分が多くそのような時はこちらから事例を話してイメージを持ってもらえるよう支援している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人の役に立ちたいという気持ちを汲みできることは手伝って頂くよう心掛けています。そして必ず感謝の言葉をかけるよう対応している。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お便りを通じご家族への協力依頼(特に物品関係)をしており、ご家族も快く対応して下さり家族と共に本人を支えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	長年診てもらっている主治医や囲碁・将棋のボランティアに対し、コロナの影響で会えないため、本人手作りの年賀状などで交流が途切れないよう支援している。	週1回他市から、良い刺激をとリビングの窓越しに携帯で曾孫の成長を見せに来所する家族もある。ホームブログを見た遠方在住の孫からは「ばあちゃんは幸せです」とのコメントが寄せられるなど、関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	「あなたがおらんと寂しいよ」入居者同士がこのように言える環境があり、お互いを思い合う関係作りを支援している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	過去に体験入居を利用された方が徘徊で園付近で迷っていたところを近所の方が発見。園に相談に来られ、本人を保護。自宅まで送り届け、家族へ引き渡した。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	1日に何度も繰り返し意向を訴える方にも何回でも付き合って話をしている。	元美容師や介護従事者の方が培った技術を発揮したり、こころを配る言動から、思いや意向を把握している。車いすの入居者の「家を空けられん」との思いを傾聴し、まずは歩けるようにと手すりでの立ち上がり訓練は、排便がスムーズとなる波及効果もあった。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族はもちろん、入居前の担当ケアマネや利用していたデイサービスの管理者へ問い合わせを行っている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録、業務日誌での申し送りを職員間で共有し現状を把握している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員、計画作成担当、ケアマネのチームにより計画を作成している。	個別の介護記録のファイルの表紙に介護計画を挟み込み、サービス内容の確認や気づきを促している。状況に応じたケアを随時話し合い、より現状に即した介護計画を作成している。	窓越しに曾孫の写真を見せに毎週来所する家族もサービス提供者に位置付け、理念の幸せなライフをサポートする介護計画作成を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	会議記録、健康記録表、食事・服薬・水分チェック表、排泄チェック表により入居者の日々の状態を管理し情報共有している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	プラスチックグローブの供給不足に伴い事前に園で大量購入し、それを入居者に販売し、入居者の負担軽減に努めた。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度はコロナ対策のため外部との交流やボランティアの受入れを行っていない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は週一回の往診に来訪しており、常に適切な医療を受けられる体制を築いている。※ストーマ造設の入居者の対応も可能になった。	定期的な往診や訪問看護で、適切なストーマ管理が行われている。入居前からのかかりつけ医受診に管理者が同行し、状況を随時家族に報告している。食べにくいと訪問歯科を利用している入居者もある。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師とは気軽に相談できる関係が築けており、週一回の訪問時以外でも電話での相談も可能となっている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院時は医療機関、家族と3者間で話し合いを設け、医療機関の見解、家族の意向、GHの要望を調整し行っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今年度、3例目の看取りを行った。話し合いを重ね家族の意向をくみ取り方針を決め、穏やかに最期を迎えることができた。最期の瞬間に家族は立ち会えなかったが家族からは「幸生園で良かった。一切悔いはない」との言葉を頂くことができた。	昨年10月、1名の方を主治医や訪問看護との連携で看取っている。「リビングで過したことで体力を消耗したのでは」と入居者を慈しむ職員の言葉やアイスクリームを食べさせたいとの家族の思いを職員が実現するなど、全職員が一丸となった支援が家族の謝辞となっている。現在も終末期の告知を受けた方があり、方針に沿って話し合いを重ねている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時は訪問看護師の指示を受け対応している。(訪問看護ステーションとの24時間医療連携体制)		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施。	日中に実施した避難訓練はスムーズに行われた。災害時は近隣の小学校が指定避難所であるが、8名が車イス利用で移動が容易ではなく、避難後の入居者の見守りも懸念している。飲料水など食料品だけでなく、感染防止グッズも備蓄している。	昨今の異常気象から備蓄台帳の整備や、キーパンソンの連絡先や内服薬状況など入居者の持ち出し書面の検討を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者それぞれの個性を考慮し、その方に合った適切な言葉かけを心がけている。	○〇さんと名字で呼称したり、同じ旧姓には名前で呼びかけている。元気がよい入居者は親しみやすい名前で声かけているが、暴言には「〇〇夫になっているよ」とユーモアのある会話でその場の雰囲気を変えている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が思いや希望を表すことが少ないのでこちらから本人の思いや希望を聞くことで自己決定の支援をしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者本人が居室で食事したいと言えば居室に配膳したり、その日の気分や希望に沿えるよう支援している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	共用の寝ぐせ直しがあり、いつでも整髪ができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者に食べたいメニューをヒアリングし献立に反映したり、全員分のお茶入れをお手伝いしてもらったり、職員と一緒に楽しみながら支援している。	季節の鏡開きのぜんざいや七草がゆなどが、会話の糸口になり、下膳やお盆拭きなどできることをお願いしている。リクエストのお好み焼きを作ったり、居室でゆっくりと食べてもらったり、経管抜去後の方にはスプーン1杯から始めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べ終わった時に残食があってもスグには引かず、完食できるように声かけや食欲が出せるような支援を行っている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを行い口腔内の清潔保持に努めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄チェック表を職員間で共有しているので入居者それぞれの排泄パターンの把握に役立てている。	尿意が不明瞭でトイレの使用手順が理解できずトイレトペーパーの異食もある入居者もあり、トイレにセンサーを設置したり、トイレ使用を確認できるようにドアを工夫している。立位の困難な方も、日中はトイレでの排泄を支援したり、夜間失禁が気になる方は本人の意向を確認し、トイレでの排泄を支援している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ヤクルトの訪問販売を利用しており、ミルミルを飲んで便秘解消に努めている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	看取りの方でもバイタルが問題なければ積極的に入浴を実施している。	週2回入浴を支援している。入浴を億劫がる場合は声かけや順番に配慮しているが、浴槽から上がるタイミングも工夫している。入浴することを忘れ、下着を下げると叩く入居者もあるが、職員は「今日は3回叩かれた」と明るく話すなど、疾患の特性を理解したケアが行われている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室の中にアロマを焚いたり、音楽を流すなど気持ちよく眠れるよう支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	専属の薬剤師が週一回訪問しており処方内容のチェックを行い、内服について常に見直しを行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	クリスマスにケーキ作り、正月にはおせち、鏡開きにはぜんざいなど季節の行事を通して入居者に喜びや楽しみを感じてもらえるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年度についてはコロナ対策のため積極的な外出支援は行っていないが、中庭を畑から花壇に作り替え、花の水やりなどで外に出る機会を作ったり、花の鑑賞に中庭に出たりと戸外に出る機会を設けている。	コロナ禍の中、ホーム周辺や園庭の散歩をしている。恒例だった地域の彼岸花の見学は、昨秋は写真でとなったが、「見事やね」との声が上がった。外出自粛が解除された折には、桜やチューリップの花見に出かけたいと管理者は話している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が現金を所持することは禁止しているが、必要に応じて本人からのリクエストに応え、希望の物品を購入して渡している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者本人の誕生日に長男からの手紙を代読し家族の思いを伝えたり、面会ができないため様子を伺う家族からの電話を本人へつなぐなど支援をしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースにはコロナ対策として空間除菌消臭装置エアロピュアを導入し、感染防止の対策を徹底している。	厨房前のリビングはテーブルや椅子、壁際にソファが設置され、食事やレクリエーションの場となっている。壁には入居者製作の彩良彩色紙が掲示され、広い廊下で歩行訓練をする入居者もある。何より、職員の穏やかな声かけや対応でゆったりとした雰囲気である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースでの席の配置は入居者同士の関係性を配慮し決めている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室掃除は毎日の部分、毎月の部分に分けて行い居心地よく過ごせるよう配慮している。令和元年度には全居室のエアコンを新しいものに取り換えている。	表札に入居者が名前を記載した居室もある。写真やテレビを持ち込んだり、色紙に絵や言葉をしたためるために、机の上に道具を並べた居室もある。どの居室も清掃が行き届き、居心地良い暮らしを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の扉には表札を掲げているが、自分で名前を書いていただき表札を作っている。		